



# 米沢有為会 仙台支部だより

第 16 号

平成28年11月29日

発行者

(公社)米沢有為会仙台支部

支部長 甲 國信

仙台市青葉区角五郎2-6-21

TEL 022-222-4790

支部総会・甲支部長講演会 於：仙台ビジネスホテル H28年6月4日

## 有為会の近況

支部だより15号を5月にお届けしてから半年になります。この間の有為会の主な出来事を報告します。

### 〔会員数〕

6月4日現在85名(正会員47、個人賛助会員36、法人賛助会員2)で、前年同時期よりも3名増です。

### 〔支部通常総会・講演会〕

6月4日(土)会場 仙台ビジネスホテル 出席者16名  
事業報告、決算、事業計画、予算等の審議・承認を行いました。

・講演会 支部総会後引き続き実施、参加者 会員16名、寮生3名

講師 甲 國信支部長、題目「大正初期の米沢人宮城県知事森正隆が残したエピソード」

講演内容については会誌66号の「支部だより」をご覧ください。

〔夏の交流会 花火鑑賞会〕  
8月5日 仙台興讓館屋上 参加者 会員7名と家族5名、寮生8名

〔秋の交流会 芋煮会〕  
10月8日(土) 会場 仙台興讓

館 参加者 会員7名 寮生12名 計19名

### 〔寮生募集活動〕

・高校における興讓館寮の説明

6月30日 米沢興讓館高 仙台寮

説明担当 滝口館長

7月23日 長井高 担当 甲支部

長 10月15日 米沢東高 担当 甲

支部長

・市町村への協力要請

11月18日 高島町 寒河江信町

長に支部長が面会し、募集への協力を

要請してきました。

有為会本部関係

〔米沢有為会第3回(通算129回)定

時総会〕

6月25日(土) 米沢伝国の杜大

会議室 (支部からの参加者 滝口館

長、甲支部長)

〔米沢有為会総合文化講演会〕

講師 我妻悦雄氏(我妻組(株)社

長) 題目 「弘前城が動いた」四百

トンの城をうごかす曳家の伝説技術」

昨年行われた弘前城天守閣の曳家を

覚えておられる方は多いと思います、

あの工事を行った会社は米沢成島町の

我妻組です。社長は川西町堀金の出身

で米沢工業の卒業生です。これまでに

数々の難工事を高い技術力で完成させてきました。  
講演の詳細は、会誌 66 号をご覧ください。

「本部理事会」

第 2 回理事会 9 月 17 日 (日) 東京興譲館 主な議題 29 年度奨学生募集要項及び寮生募集要項について、百二十周年記念事業の検討と寄付の募集について、次期本部役員選考役員会の設置について、東京興譲館の居室の改修について

(支部長 甲 國信)

支部だより 15 号の訂正

p.4 2 段目 後から 6 行目  
大武清夫さんの「私と有為会」  
外聞 → 仄聞 に訂正  
誠に申し訳ありませんでした。  
編集者

支部だより原稿募集

随想、旅行記、趣味など何でも結構です。次号は 5 月発行予定、是非投稿下さい。

会員のコーナー

米沢弁と有為会の創立—NHK「歴史秘話ヒストリア」を見て思ったこと

甲 國信

10 月 7 日に NHK 総合で放送された「歴史秘話ヒストリア」日本人なのに通じナイ」は、明治初期の日本語の混乱と標準語の誕生を扱って面白かった。江戸時代、日本は三百の藩に分かれて、それぞれの土地でお国言葉が話されていたが、人間の交流は盛んではなかったから、標準語がなくても不自由はなかった。しかし、維新後全国の各地から東京にやってきた人たちの間で、言葉が通じないという問題が起った。軍隊で起きた、命令が通じないという事態は、国家の大問題であった。番組はこうした大問題に対する様々な解決策(中には、いっそ日本語を捨てて英語にしまえとの極論もあった)を紹介し、東京帝大教授上田万年が現在の標準語の原型を作るまでを描いていた。この番組は、井上ひさしが

同じテーマを扱った「国語元年」というドラマを思い出させた。  
維新から百五十年後の今日では、テレビのお陰で日本中どこに行っても標準語が話されていて、土地の言葉は老人だけのものになり絶滅の危機にある。「ズーゾー弁」という言葉自身も死語になりつつある。

高校生当時、生徒の間で、東京に出た米沢出身の学生が、「君は米沢から出てきたのかね」と聞かれて、「ンダシ」とは言わなかったものの、「そうですシ」と答えたという笑い話が伝わっていたから、標準語をうまく話せるかは、生徒一般の関心事であったと思われる。

東京から従姉妹たちが遊びに来る時は、自分の言葉をあまり気にしなかったが、こちらが東京に出かけた時は神経を使った。しかし、気をつけたぐらいでは強い訛りはなくならない。やはり言葉を気にせず話せる同郷人はありがたかった。

このことをさらに強く感じたのは外国で生活した時である。この場合、同郷人は同国人に置き換わる。出身地は

問わない。四十年前ワシントン郊外の研究所に留学した時、住んだ場所に日本人は見当たらず、ようやくそれらしき人を見かけて喜んで声をかけたら、韓国の人だった。

研究所にいた日本人仲間とは、家族ぐるみで親しく付き合った。何といっても母国語で自由に話せることがありがたかった。また、アメリカに着いてしばらくの間は物珍しいことばかりだが、そのうち、自国と異なる社会を覚めた目で見えるようになると、それまで気がつかずにいた自国の良さが見えてきて、みんな多少とも愛国者になり、このことが結びつきをさらに強くしたように思う。

話を明治二十年頃の東京に移す。伊東忠太先生始め有為会創立の中心となった米沢出身の青年達は、本郷森川町空橋の下宿屋で、芋の子を洗うような合宿さながらの生活を送っていたという。当時の地方人にとって、当時東京暮らしことは、現代の人間が日本人のあまりいない海外の地で生活するのに近かったと考えると、同郷人が集まったことは頷ける。集まる理由は、同郷

人同士の気安さ、特に「言葉の心配がない」ことが大きな要素としてあったのではないかと。つまり、米沢弁が有為会の創立を後押ししたと考えられる。これに、海外で高まる愛国心に相当する郷土愛が加わって、さらに郷党の結束を強くしたと想像出来る。

しかし、同郷人の結束を強くした主な理由を方言に求めるのは的外れで、最も大きな理由は、維新で賊軍となり、国の諸活動の中枢から外れてしまった状況を結束して打開することにあつたと見るべきだろう。そのこと無くしては、たった一年で四百人を超える会員を集めるのは無理ではないか。

有為会創立に携わった人々の非凡さは、同郷人の集まりを単なる親睦団体とせず、郷土愛を土台に、相互の親睦と切磋琢磨を目的とし共存共栄を計る団体としたことである。その切磋琢磨ぶりは、創刊時の有為会誌に現れていて、支部講演会で紹介した、大正初期の宮城県知事となる森正隆が学生時代に書いた論説はその一例である。

以上、NHKテレビの「歴史秘話ヒストリア」を見て頭に浮かんだことを、

支部だよりの埋め草の記事として書いた。妄想に近いかも知れない。

(支部長 仙台市青葉区在住)

**今後の行事予定**

- ★12月18日(日) 第一回入寮面接 (会場：仙台興讓館)
- ★1月14日(土) どんと祭 (会場：仙台興讓館)
- ★1月21日(土) 新年会兼卒業寮生歓送コンパ (寮生会主催) (会場：仙台興讓館)
- ★2月18日(土) 第二回入寮面接 (会場：米沢置賜総合文化センター)
- ★2～3月中温泉旅行
- ★3月11日(土) 第三回入寮面接 (会場：米沢置賜総合文化センター)
- ★3月 末日(日) 寮生総会
- ★3月26日(日) 第四回入寮面接 (会場：仙台興讓館)

**行事報告**

**夏の交流会(花火鑑賞会)**

H28年8月5日

於：仙台興讓館屋上

参加者 会員7名+家族5名 寮生8名 計20名。天気・風に恵まれ最高の花火を鑑賞できた。



**秋の交流会(芋煮会)**

H28年10月8日

於：広瀬川河原

参加者 会員7名 寮生12名 計19名。



朝から小雨、寮での芋煮会に変更、米沢直送の材料で寮生の味付けも上々です。昨年のリフォームで寮の食堂もトイレの評判も上々でした。

寮の庭の植物 ヒガンバナ

滝口 政彦



寮裏庭のヒガンバナ H28.9.11

寮の裏側にヒガンバナ（写真）が二カ所に数十株生えているのに初めて気付いたのは昨年秋草刈りをしていときだった。今年庭の草刈りを9月に行つたときちようど花盛りであつた。葉がなく真つ赤な花だけ目立つ異様な姿で10本以上固まつて咲いている。ヒガンバナは不思議な植物である。花が咲いているときは葉がない。花が咲いても実と種ができない。どうして増えるかという地下の芋—タマネギと同じ鱗茎がある。芋にはリコリンという毒がある。日本には野生はなく、中国から渡来し人の手により芋が運ばれて分布域を広げたようである。

万葉集に壹師(いちし)という植物が載つた歌が一首

路の辺の いちしの花の 灼然いちしろく

人みな知りぬ 我が恋妻は

(巻11の2480)

その意味は単純で、私があの子を恋していることは道端のいちしの花のよなもので明らかに世間の人が皆知つているといふ恋歌である。

このいちしの花が従来ギンギン、クサイチゴ、エゴノキとか言われてきたが、植物学者の牧野富太郎博士がヒガンバナ説を出した。その文章をみると道端で目立つ「いちし」にふさわしい花としてヒガンバナをまつたの思いつきで出しており、ヒガンバナの方言でどこかの地方に「いちし」が見つければいいと記している。いちしよりも白い花の感じで、いちし||ヒガンバナ説は納得できない人が多いようだ。

ヒガンバナは史前帰化植物といわれる。史前帰化植物とは、前川丈夫博士(昭和18年)「植物分類地理」(小泉博士還暦記念号…この学芸誌は米沢出身の植物学者京都帝国大学教授小泉源一博士により創刊)により提唱された概念で、稲作に伴い伝播してきた植物群をいう。ヒガンバナが有史以前に帰化していたかについては疑問が

ありそうだ。なぜなら、確実な和名は室町時代にならないと現れないからである。

彼岸花は曼珠沙華まんじゆしゃげとも呼ばれるが、

なぜか解らないが

「赤い花なら 曼珠沙華

阿蘭陀屋敷に 雨が降る

濡れて泣いてる じゃがたらお春

という歌詞が口に出ってくる。ネットで調べてみると戦前の昭和14(1939)年の歌謡曲「長崎物語」の歌詞である。戦後生まれの私の記憶にあるのはなぜだろうか、よく解らない。山口百恵の歌にも「曼珠沙華まんじゆしゃげ」(作詞:阿木燿子) という激しい恋の炎を歌い上げたものがあるが、真つ赤に咲き乱れる彼岸花のイメージとしてはこちらがふさわしい。

同じ日に季節外れのガクアジサイも咲いていた(写真)。梅雨頃咲くのに曼珠沙華に合わせるには不思議だ。そういえばガクアジサイから品種改良されたアジサイの学名は「長崎物語」に出てくる長崎出島の阿蘭陀屋敷とは大いに関係がある。江戸末期出島に滞在していたオランダの医者であり博物学者のシーボルト



寮裏庭のガクアジサイ H28.9.11

が Hydrangea Otakusa という学名を付けた。今年にはシーボルト没後150周年ということを記念して上野の国立博物館でシーボルト展が開かれている。いつか Otakusa という学名の由来について書いてみよう。(仙台興譲館館長)

・編集後記…今年も残り後わずか。日本も世界も大きく揺らいでいます。どこに向かつて行くのでしょうか。争いのない平和な世界を願いたい。皆様よいお歳をお迎え下さい。

編集責任者…滝口政彦